

幼児の自我の発達に関する行動評定

— 3歳から6歳までの発達の考察 —

研究第5部 望月 武子

I 目的及び方法

幼児の自我の発達を行動面からとらえ評定する試みとして、前年度は評定項目を選定し、5, 6歳児について評定項目を通してみた発達の実態を報告した。今年度はさらに調査数を増やし、評定項目（自己実現、自己統制、生活習慣の自立の3領域各25項目）について、3歳から6歳までの幼児の実態を把握し、発達の変化を検討するとともに、項目分析を行って項目内容を吟味することを目的にした。なお、調査項目の内容は表2の「調査項目Ⅰ」が自己実現の、「調査項目Ⅱ」が自己統制の各内容である。

調査方法は前年と同様に、都内、埼玉県下の幼稚園を通して調査票を配布し、母親に記入を求めた。

最終的な調査数は表1の通りである。

表1 調査数

年齢	男	女	計
3歳	47	47	94
4歳	93	98	191
5歳	127	120	247
6歳	74	76	150
計	341	341	682

II 結果及び考察

1. 評定項目の通過率

自己実現、自己統制の領域、各25項目について、3歳から6歳の通過率をa, b, c, d, の評価段階別に見たものが図1, 2である。生活習慣の自立の領域は紙数の都合で図示を省略した。実線から下の部分がa段階（日常的によく見られること、よくできること）破線から下の部分がb段階（ときどき見られること、やらせればできること）破線から上の部分がc, d段階（できないこと、

まだ経験したことがないこと）の割合を示している。

(1) 自己実現

自己実現の領域（図1）では、年齢とともに通過率が上昇する項目と、上昇的な発達変化を認められない項目があった。後者は項目1, 4, 6, 7, 11, 13, 23, 24, 25, である

これは、項目1, 4, 7, 11, 13, 24, がとらえる行動が、発達過程の一時期に特徴的にみられる自己主張あるいは自己選択の行動であって、発達とともに行動様式が変容するものであること、そして、その行動様式をもち続けることは年長児ではむしろ未熟性を示す性質のものであるためと考えられる。

また、6, 23, 25, は、子どものもつ行動傾向として自己実現に関連する重要な要素とは考えられるが、発達的な変化をとらえるための質問項目として、一般的で、しかも具体的な場面を設定しにくかったことによるものであろう。

いずれも評定尺度として用いる場合には検討を要する問題である。

(2) 自己統制

自己統制（図2）の領域では、項目により緩急の差はあるが、項目25を除くすべての項目で年齢に伴い通過率が上昇する発達の変化をみることができた。項目内容が比較的具体的な場面をとらえていることや、自己統制力の発達が、より統制的な方向へ進む性質をもつためであらう。

(3) 生活習慣の自立

生活習慣の自立に関する各項目は、最も明瞭に発達的な変化をみることができた。（図示は省略）

(4) 性差

自己実現の領域では3～6歳を通して全般的にみると性差は認められないが、各年齢でみると3歳では項目25が男児優位、4歳では項目18, 5歳では項目12, 15, 6歳では項目12に女児優位の傾向がみられた。

自己統制の領域では3～6歳を通して、項目6, 9, 11, 19で女児優位の傾向がみられており、各年齢でみると、3歳では項目7が男児優位、6歳では項目2, 13で

N = 3歳 94
 4歳 191
 5歳 247
 6歳 150

— aの区分 数字%
 - - - c+dの区分

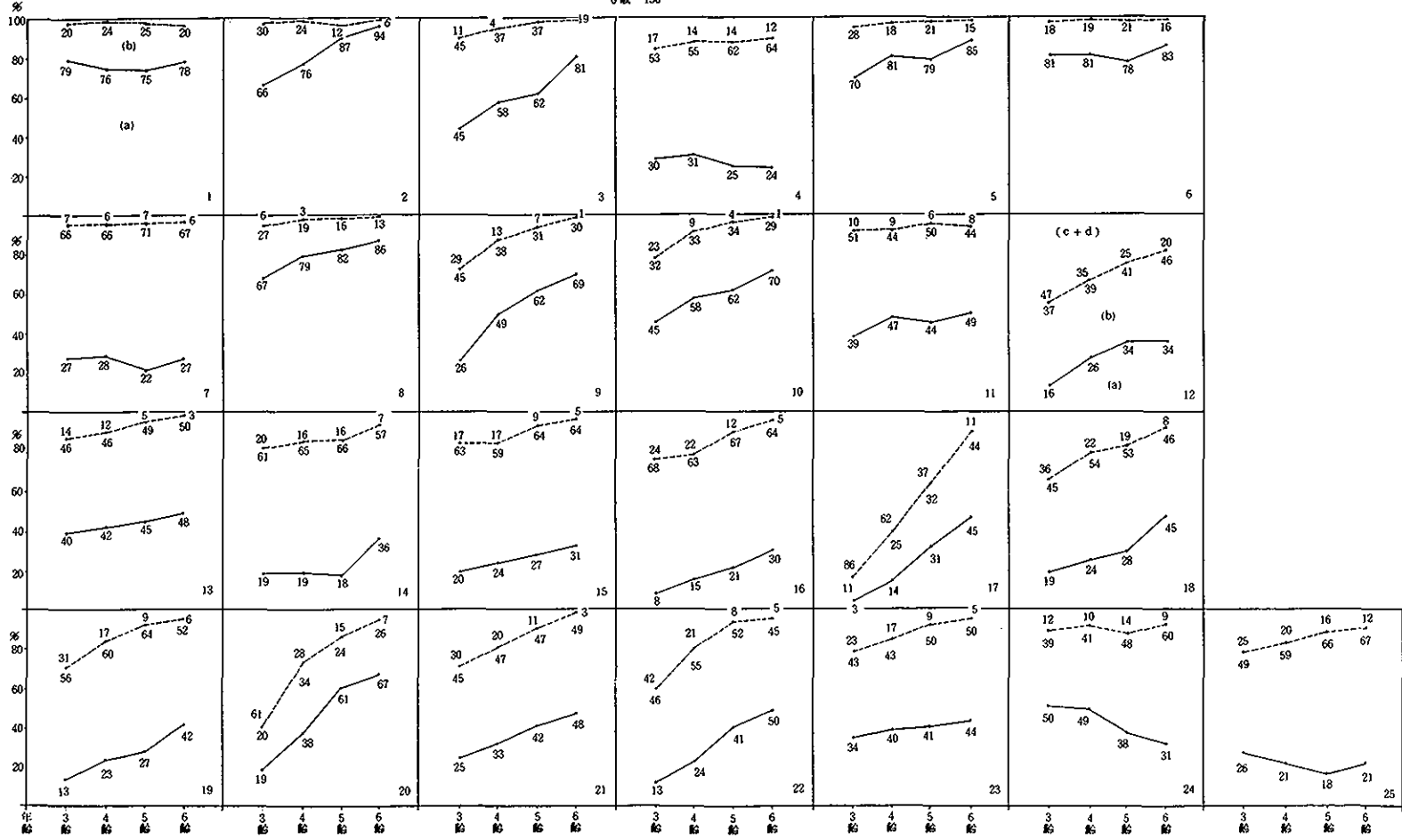


図1 I 自己実現 発達の變化

N = 3歳 94
 4歳 191
 5歳 247
 6歳 150

—— aの区分
 - - - - c + dの区分
 数字は%

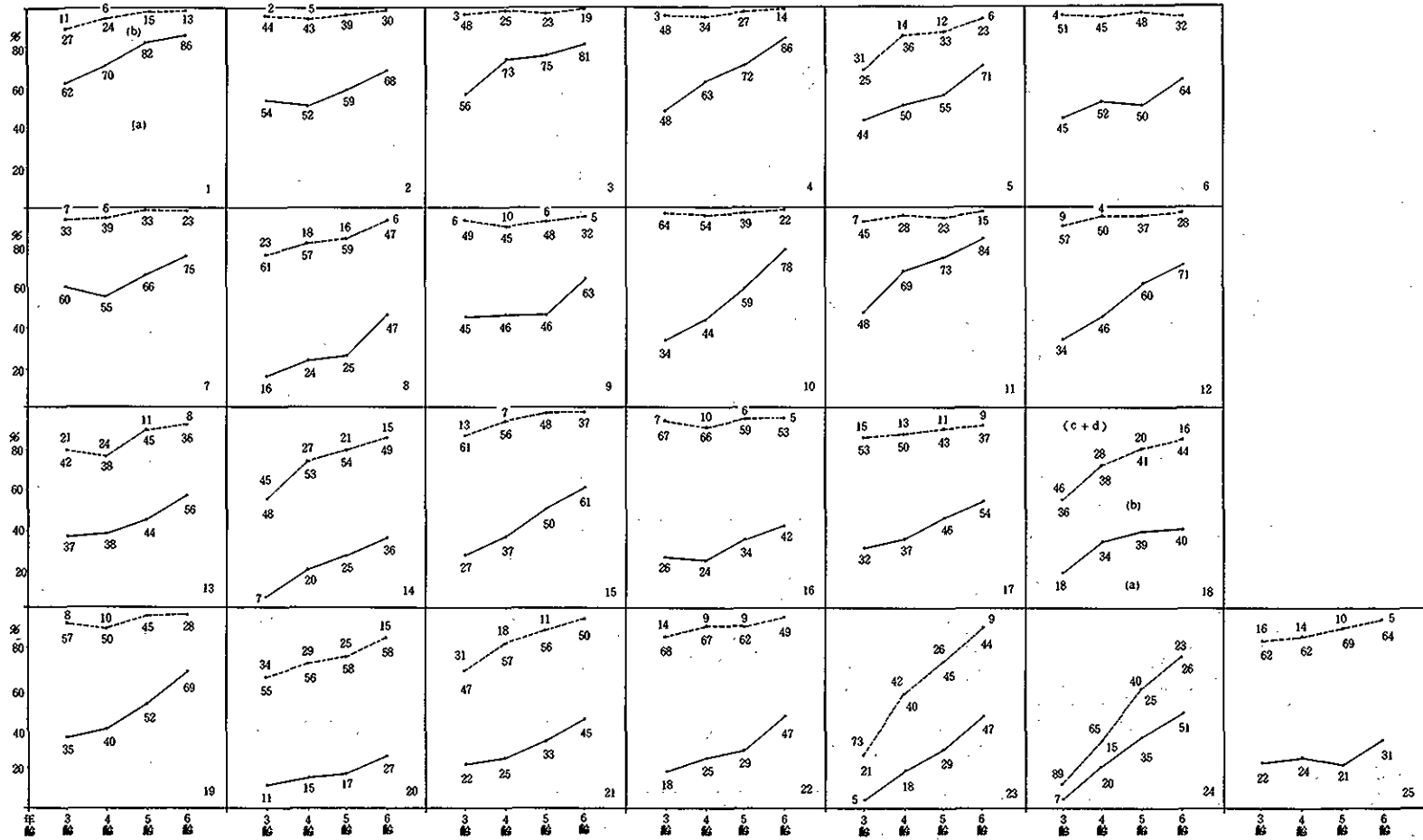


図 2 II 自己統制 発達の變化

望月武子：幼児の自我の発達に関する行動評定

女兒優位の傾向がみられている。

生活習慣の領域では項目3, 10, 11, 14, 18, 20, 23で一般的に女兒が優位な発達を示していた。各年齢でも3歳の項目8は男児優位であるが、4歳の項目6, 5歳の項目12, は女兒の発達が早い傾向がみられている。

2. 領域別得点

各領域の発達を総体的に把握するため、項目ごとにa段階を2点, b段階を1点, c, d段階を0点として、領域別の得点を算出し年齢別に平均値を求めた。また、各項目についての母親の意見も同様に得点化した。

図3は、3歳から6歳の得点の変化と、母親の意見の変化を関連させて領域別にみたものである。

すべての領域で年齢とともに得点の上昇がみられ、明瞭な発達の變化が認められた。

なお、各領域に対する母親の意見は、一目して明らかのように、自己実現の領域では子どもの状態に比し母親

の要求は低い。自己統制の領域では両者に大きな差はないが、3, 4歳では子どもの状態に比し母親の要求が低いに対し、5, 6歳では母親の要求が高くなり関係が逆になっている。5, 6歳になると自己統制への母親の要求が強まってくることを示している。

生活習慣の領域では、子どもの状態に比し母親の要求は一貫して高く、子どもに自立を求め、発達をひきあげる働きをしているものと考えられる。

領域別の子どもの得点の発達の變化を性別で比較したものが図4である。自己実現領域の3歳児を徐き、いずれの領域、年齢でも女兒の発達が優位にあることを示している。

3. 因子分析

3歳から5歳まで、各年齢別に主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転を行った。ここでは第2因子までをとりあげ、因子負荷量0.4以上のものを表2

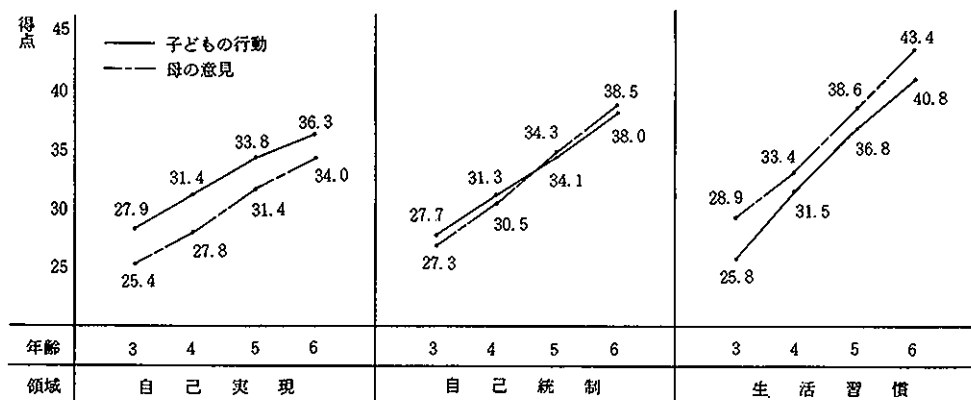


図3 得点からみた発達の變化と母の意見の變化の比較

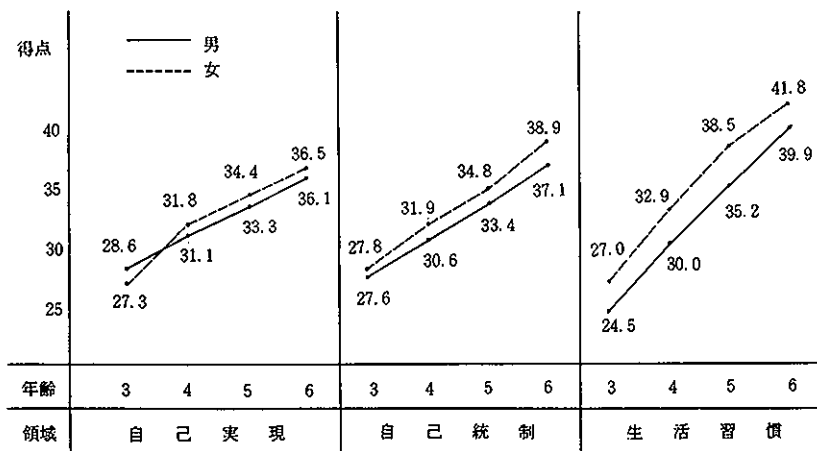


図4 得点からみた発達の變化の性別による比較

望月武子：幼児の自我の発達に関する行動評定

表2 因子分析

調 査 項 目		3 歳		4 歳		5 歳	
		因 子		I		II	
		固有値	寄与率	固有値	寄与率	固有値	寄与率
1	賞められると得意になってやる						
2	母から離れて友だち遊びを楽しむ				0.670		
3	友だちに「……しよう」と誘いかけて遊ぶ				0.713		
4	友だちに自分のやりたいことを主張してけんかになる						
5	自分からやりたいことを見つけて良く遊ぶ						
6	遊びはじめると夢中になって意欲的に遊ぶ						
7	親の喜ぶことを自分からすすめる						
8	腹痛など自分で体の異常を訴える						
9	友達を自分の家に誘って来る				0.550		
10	ゲームやかけっこの時勝とうとしてがんばる	0.503					
11	「こんなことできるか」と得意がったり自慢する	0.753			0.431		
12	小さい怪我なら自分で薬をつける						
13	納得できないと理屈をいって口答える						
14	いわれなくてもお客様に挨拶する						
15	失敗してもめげずにがんばってまたやってみる						
16	自分でやり始めたことや、決められたことを終りまでやりとげる						
17	ひとりで近所の店にお使いに行く						
18	順番がくれば人の前で話したり歌ったりする						0.523
19	他の子が困っているとすすんで手助けをする	0.442					0.498
20	ひとりで友達の家遊びに行く						
21	遊びやグループ活動の中で自分の意見をいう	0.739			0.430		0.568
22	遊びのルールなどを友達に教える	0.741					0.614
23	遊びを工夫したり新しい遊びを考え出す						0.664
24	玩具やお菓子など自分の欲しいものを選ぶのにあまり迷わない						
25	自信をもって積極的に行動することが多い						0.436
調 査 項 目 II							
1	頭を洗ってもいやがったり泣いたりしない						
2	欲しい物があってもわけを言いきかせればききかける			0.541			
3	自分の物と人の物を区別して扱う		0.645	0.452		0.608	
4	友だちに自分の物を貸して遊ぶ			0.683		0.694	
5	予防注射のとき泣いたり、嫌がったりしない						
6	乗物の中で騒いだり、動きまわって人に迷惑をかけない		0.679				
7	転んでも小さい怪我なら泣かない						
8	お客様に出した菓子をほしがらない						
9	お客様にいったらしばらく行儀よくしている		0.703				
10	友だちと順番に玩具や遊具を使って遊ぶ			0.545		0.679	
11	ごっこ遊びでそれぞれの役割をとって遊ぶ					0.563	
12	友達と互に主張したり妥協したりして遊ぶ					0.531	
13	かわいそうな話を聞くと同情したり涙ぐむ						
14	人前で泣くことをこらえる						
15	約束をするとき守ろうとする						
16	人が話をしている時はよくきいている						
17	おやつ・就寝など決められた時間は大体守る						
18	登園の時間には遅れないよう自分で注意している						
19	危険な遊びなど禁止されていることはしない		0.719			0.492	
20	ゲームに負けても怒ったり騒いだりしない						
21	自分より小さい子のわがままをゆるす						
22	他の子に迷惑をかけたらあやまる					0.420	
23	車の通る道をひとりで歩かせても心配ない						
24	ひとりで1時間ぐらい留守番をする						
25	自分のあやまちをごまかさないで認める						

因子負荷量 0.4以上のみ記入

に示した。

各年齢間で因子構造に共通性を有しながらも、第1因子で説明される内容は各年齢時点で多少の違いがあった。

すなわち、3歳児の第1因子は「友だち関係における自己領域の拡大」と呼べる自己実現の行動であり、第2因子は自己統制領域の「禁止への適応」である。

4歳児の第1因子は「友だちへの同調」と命名できる自己統制領域の行動となり、第2因子に自己実現領域の「他への積極的な働きかけ」がみられる。表示していないが第3因子として自己実現領域の項目5、6を代表とする「意欲的行動」が出ている。

5歳児では第1因子として「他への協調的適応」(自己統制領域)が出ており、第2因子は、「グループでの主体的行動」(自己実現領域)第3因子は自己実現領域の項目17、20、自己統制領域の23を代表とする「行動空間の拡大」が出ている。

これらの内容から、自己実現、自己統制の両側面の発達過程で、それぞれの時期に優位になる発達側面や、達成する機能的側面をうかがうことができる。

3歳では、自己認識が進み、他者との関係で自己を主張し拡大する一方、しつけなどを通して禁止への適応が可能になり、行動抑制を学び始めており、4歳では自己、

他者の認識の上にとって他者へ同調することができ、自己活動を充実するために他者への働きかけが可能になっている。5歳では自己のおかれている社会的立場への認識が進んで、他者との間に協調的な適応がみられる一方、集団内でも主体的、能動的な行動が可能になり始めるという、従来から考えられている発達の様相がとらえられている。

III 要 約

自我の発達の評定を意図して選定した質問項目について、3歳から6歳の幼児682名の資料により発達の実態をとらえた。個々の項目では、一部に発達のな変化をとらえにくいものもあるが、領域別得点では各年齢間に発達の變化を認めることができた。

また、因子分析により3歳では自己を意識して友だちとの関係での自己領域の拡大、4歳では自己を抑えて他者への同調、5歳では他への協調的適応が第1因子として出ている。

なお、本研究は立正大学短期大学部野田幸江の協力を得ている。

Behavior Evaluation in Reference to the Ego Development of Preschool Children

Takeko MOCHIZUKI

This study was intended to develop the behavior evaluation method by which we'll be able to understand the ego development as the inner part of mental development of each child through the outer daily life behavior. AS the second step of this study, the developmental state of 682 children ranging from 3 to 6 years olds in Tokyo and Saitama districts was investigated, through the questionnaire which includes 75 items, concerning to self assertion, self control and establishment of daily life habit categories. However there were some items through which it was hard to understand the developmental change of children, each total score of three categories showed that the questionnaire could understand the developmental change in accordance with the aging of children. AS a result of examining the factor analysis, characteristic of self expansion in relationship with friends in three years of age, self restriction and coordination with others in four years of age, and cooperative adjustment to others in five years of age were shown as the first factor.